

SDGsは「大衆のアヘン」か

長谷川 修

今年の新書大賞を受賞し今評判の、斎藤幸平著『人新世の「資本論」』を読んだ。

「人新世」とは、地質学上の新用語で「完新世」に続く時代である。著者は「人類の経済活動が全地球を覆ってしまった時代」と定義し、「人新世」時代の気候変動や環境破壊は「ポイント・オブ・ノーリターン」寸前にあると認識する。グローバル資本主義が加速する現在、SDGs（持続可能な開発目標）のような、成長を続けながらの二酸化炭素削減は不可能であり、SDGsは「大衆のアヘン」と断ずる。

著者は資本主義が生んだ気候変動問題、南北問題、格差問題等は、資本主義を温存したままでは解決できないと考え、活字化されていない晩年のマルクスの「研究ノート」から、エコロジカルな社会主義に着目する。この観点から、私たちは資本主義を脱し、エネルギーや生産手段などの生活に不可欠な「コモン」を自分たちで共同管理する「脱成長」コミュニケーション」に進むべきだと結論する。

「脱成長」と言えば、J・ステイグリッツの「進歩的な資本主義」や広井良典の「定常型社会」が、「コモン」と言えば宇沢弘文の「社会的共通資本」が直ぐに頭に浮かぶが、Y世代の著者は先人達の論考を、いずれも微温的で資本主義の超克を目指していないと批判する。最終章では、Z世代のグレタ嬢やウォール街占拠運動を例に挙げ、「3・5%」の人が団結すれば社会は大きく変えられると、変革への道を説く。

若手経済思想家によるマルクス未発表の文献に基づく現代資本主義の分析は、新鮮で面白かったが、結論部の「脱成長コミュニケーション」構想には疑問が残った。実現するには人々の価値観の大転換が必要となるがそんなことができるのか、また、権力や財力を握っている側の抵抗は強固なものになると予想される。

私自身にできることは消費の抑制程度で、これまでのライフスタイルを大きく変えることはできそうもない。逃げ切り世代の我々は、未来に生きる若者世代に席を譲るべきか。